

作務衣

平成30年6月第3週放送

今では広く一般の方にも、お寺での坐禅会や、ご家庭でくつろぎの時に着られる様になった作務衣ですが、その起源をたどると意外に様々な変遷を辿っていることに気がきます。

一般には禅の修行道場における、お掃除や作業をする為の作業着ですが、その機能性から僧侶以外の、陶芸家・書道家・整体師等を通じて和風料理店の制服、旅館の寝間着としても広まっていったとされています。

もとは三衣さんねといった三種類のお袈裟の一つで、道元禅師が著された『正法眼蔵』の「袈裟功德」の巻に出てくる安陀衣あんたえが作務衣の原型とされています。修行道場では以前は、着物をたくし上げてお掃除や作業をしていました。

それから時代が下って袖を絞り膝下までの丈のある長作務衣ながざむえが登場し、これと戦時中に広まったモンペを合わせるようになることで、上に着る、今の短作務衣たんざむえが現れます。上下が分かれた形になるのは実は戦後のことなのです。

そのモンペは古くは東北地方の農作業着でありましたが、先の大戦中には活動衣として広く着用が勧められました。裾を絞って爆風を防ぐ、即ち防空用として広まったのでした。少し昔まで、作務衣の上着をズボンの中に入れた人を見掛けたのは、モンペの着方に忠実だった頃の名残です。

一方、以前から男性用の室内着として甚平というものがありましたが、半袖半ズボンで専用でした。これを長くした上に袖と裾も紐やゴムで絞って年間を通じて着られる様にして、作務衣のようになったとも言われています。

今では作務衣の素材も麻や縮緬ちりめん等と豪華になり、夏用の作務衣はかつての甚平の姿に戻りつつあります。戦後、洋裁ブームがおき、洋服の普及を推進しましたが、昨今では古くなった和服をリサイクルして着る女性が増えています。服装が自由になるということは、世の中が豊かで平和であることの表れです。作務衣は、モンペの機能性と甚平の安らぎ、体に負担を掛けないという特性から、これからも、もっと多くの人々に広まってゆくのでしょう。

『 禅のこころ -曹洞宗- 』

仏教を学び実践するものとしては、着る物を大切に扱う心を受け継いで欲しいと願うばかりです。

— 終 —